

3年計画 —中四国王座優勝を目指して—

大学院工学研究院情報部門特任教授（前部長） 渡邊 敏正（昭和43年度入学）

「3年計画」という言葉は私にとって懐かしい響きを持つ。昭和43年4月に入学し、昭和47年3月に卒業した。その後本学の大学院修士課程に進学したので、学生としての6年間を選手の立場でテニス部に直接的に関わってきた。学部時代の4年間はテニス部にとっても私にとってもかなり大きな意味を持っており、中四国王座に焦点を当ててこの辺りのことを少し書いてみようと思う。

以後の記述のベースとなるので、まずその当時の王座戦や個人戦の大まかな年間スケジュールを述べておきたい。現在とはかなり異なっている。3月下旬から4月上旬に春の県王座戦、4月下旬から5月初旬にかけて中四国王座戦と（春の）個人戦、7月中旬から五大学と中国学生選手権、7月下旬から8月初旬に県学生選手権、8月終わりから9月初めが中四国（秋の）個人戦、10月から11月にかけて秋の県王座戦、となっていたと思う。これらの中にいろいろな一般の大会があり、個人の判断で参加する：国体の県予選や中国地区予選（予選を通過すれば本大会）、一般の中国選手権なども含まれる。春の県王座戦は次に来る中四国王座の予行演習となり、秋の県王座戦は次年度戦力の強化やチェックの機能を持っていた。なお、部を運営する幹部は3年生を基本とし、その任期は中四国王座終了時（5月）が区切りであったと記憶している。

中四国王座優勝は、その重要性は今も同じであろうが、当時のテニス部にとっては「悲願」と言っても過言ではなかった。中四国王座戦は昭和41年度までは春秋二度あり、一度1部校に昇格したことがあったようであるが、次の大会で2部校に降格していた。2部校を維持しながらも、1部校との入替戦では勝利に見放され、私が入部した43年春も入替戦で敗れていた。

昭和43年度（43年5月～44年4月）の主将は工学部土木工学科に在籍されていた中本博次さんであった。『次年度（44年春）に1部校に昇格し、45年春では1部校を維持し、46年春で王座を獲得する』というのが中本さんから何度も聞かされた「3年計画」であった。そして計画通り昭和46年4月下旬、主将として臨んだ中四国王座戦（松山）で初優勝する。いつごろからこの言葉を聞くようになったかははっきりしないが、1年生の秋には知っていたように思う。

昭和44年4月、山口での中四国王座戦では、2部校（広島大、徳島大、香川大、愛媛大）で優勝、その後にあった当時の広島商科大（現、広島修道大）との入替戦に勝ち、1部校昇格を果たす。この時の状況を部誌ダブルフォールト（DF）第16号に掲載した「1部校」と題した私の文章から抜粋、一部修正して掲載しておく。（原稿作成は昭和63年（1988年）8月31日付となっており、入替戦から20年後に書いたものである。）

「…ファーストセットは1ゲームを取った程度だと思う。セカンドセットは比較的簡単

に取り、ファイナルセットは互いにサービスキープし、私は先行しながらも相手サーブがブレイクできずに追いつかれることを繰り返し、5-5からの私のサービスゲーム、6-5となる直前に『勝った』というパートナーの田中和男さんの声が耳に入った。彼は既に勝利し、4年生の土井高明さんを応援していたと思う。私はポイントを取ることに集中してプレーを続け、このゲームを取った。私の相手は主将であり NO.1 であったからがっかりしたのであろう、次のゲーム、15-40 からダブルフォールトし、私は勝った。昭和 44 年 5 月、中四国王座 1 部 2 部入替戦、対広島商科大学（現、広島修道大学）における最終 NO.1 の戦いであった。先程の声は土井さんの 5 ポイント目の勝ちを知らせるもので、結局、D2-1、S4-2 の勝利となった。…」

この試合に先立つ 4 月の県王座戦での広島商科大学戦、中四国のシード選手であるその相手に 2 年生である私が敢えて挑戦し、後陣で拾う戦法で勝利した。それを踏まえた主将の中本さん、前主将の平林さんなどの強い示唆により、ポイントを取るために入替戦で再び挑んだのである。同じ戦法で開始したが、相手は対処法を研究しており、コート面が悪かったこともあって、フォアの強打を武器とする相手のペースとなった。セカンドセットからはネットプレーを中心とすることでペースを変えて成功したが、最終セットでは相手もそれに慣れて接戦となった、という経緯で上記の文章に続くのである。原稿の最後辺りには次のような文章がある。1 部校昇格を果たした当時の自分の熱い気持が伝わってくる。



昭和 44 年 4 月の中四国王座戦（山口）2 部校優勝後のスナップ
（山口維新コートにて：その後、5 月入替戦に勝って 1 部校に昇格）

「…44 年 4 月下旬の中四国王座戦（山口）では 1 部校の試合をスタンドから遠目に見ながらパートナーの田中さんと 2 部校優勝、1 部校昇格を心に誓ったものである。入替戦に勝利し、『来年からは 1 部校で試合ができる』というのが 2 年生であった私にとっては何よりも嬉しいことであった。この年以來、20 年間 1 部校が続いている。…」

昭和 44 年度（44 年 5 月～45 年 4 月）の主将は当時の政経学部（現、法経学部）在籍の浜本卓伸さんであった。大学に入ってテニスを始めた方であり、同学年には部を率いるテニス経験者がいなかったこともあって、2 年生の私が副主将をすることになった。このことが、私に 3 年計画を意識させ、最終年度に向けた準備としての意味を持つことは十分理解できたが、下位の学年が上位の学年に指示を出す場合もあるというやりにくい立場ではあった。メンバーの層の厚さやレベルは十分とは言えなかったので、浜本さんと検討を重ねて短期・長期の練習計画を練り、着実に実行した。その結果、昭和 45 年春の中四国王座戦（岡山）では 1 部校 3 位となって、1 部校を維持できた。昭和 43～45 年度の中四国王座や県王座では、当時歯学部 4～6 年生であった中島朋見さんの存在は大きかった。他大学では医学部歯学部の学生が主力メンバーであることが多々あるが、広島大では本部テニス部と医・歯学部テニス部とは別活動であった（その後、改善されたようである）。しかし、中島さんは 6 年間変わらず本部テニス部の練習に参加し、王座戦メンバーとして活躍された。深く感謝している。



昭和 45 年 5 月の中四国王座戦（岡山）で 1 部校維持決定後のスナップ
（岡山大学テニスコートにて）

昭和 45 年度（45 年 5 月～46 年 4 月）の主将は私であった。中四国王座獲得のためには、個人戦で上位に入る実力をもつ選手が少なくとも 6 名は必要であり、さらにその中には上位シードが多く含まれることが望ましい（これらは必須であると言ってもいい）。大学からテニスを始めてシード選手になる、あるいは個人戦に優勝する、といった例は他大学に比べ広島大学は多いのであるが、やはり高校時代からある程度実力を備えた選手の数がキーになることは否定できない。要は出場選手の層の厚さとレベルの戦いである。幹部であった我々 3 年生には王座戦メンバーとなりうる選手は 3～4 名いたが、2 年生にはテニス経験者が少なく全体的戦力としては層が薄いという感じは否めなかった。幸いなことに、1 年生にはメンバーになりうるテニス経験者が 3～4 名いたので、3 年生、1 年生を主体にし、2

年生を加えることでメンバーを構成する方針を立てた。このメンバーを維持しながらできるだけレベルを上げることを前提に、年間練習計画を作成した。フォア、バック、サービス、ボレーのプレースメント、スマッシュの確実性、などを獲得すること、これを自分の考えに従って自在に使えること、を大きな到達目標として、練習での技術と信頼性の獲得、および試合での実践による定着を日頃の活動において目指した。

このような地道な取り組みが、昭和 46 年 4 月、中四国王座戦（松山）の初優勝に結びつき、3 年計画を達成できた。長い間の多くの部員の方々に支えられた結果である。当時の試合の様子などは、体育会新聞第 34 号（昭和 46 年 7 月 7 日発行）、DF 第 4 号（昭和 51 年 3 月発行）、および私の退職記念文集（DF 増刊号：平成 25 年 3 月発行）に寄稿しているので、ここでは省略する。

その後、広島大学は昭和 46～49 年度も 1 部校を維持し、そして昭和 50 年度からの中四国王座戦 10 連覇に続く。1 部校であることが当然となっている現状は広島大学のレベルが高く維持されていることの証である。現在の部員の方々、あるいは将来の部員の方々に、1 部校昇格を目指した当時の思いを伝えて、さらなる向上を期待するところである。

（2013.9.11.作成；2014.2.19, 2018.10.25.修正；2021.3.3.写真入替, 作成履歴記入）